

第7分科会

若者と仕事 ～新しい働き方をもとめて

木下博行（労協センター事業団
九州南事業本部）

山口孝治（労協センター事業団鹿児島第2事業所）



第7分科会(若者と仕事～新しい働き方をもとめて)は、青年・学生が現代の混沌とした時代を自分の地域からできることを通して変えていこうとする取り組みが行われていることを伝え合う分科会となりました。

分科会には、まちづくりに取り組む青年たちが市の助成事業として高校生の社会参加を支援している北九州青年みらい塾、ユース(スチューデント)ワーカーズコープづくりに取り組んだ鹿児島大学の学生、地域で子どもと高齢者を結ぶ取り組みを行っている杷木子ども未来館の若い女性たち、子育て支援をグループで取り組む北九州大学の学生(子育て支援グループにじ)、介護に関わる若者を育ててきたふくしの家(NPO)の取り組み、労協現場で働きながら自らを取り戻し地域福祉事業所の開所に取り組んできた若者など多彩な報告がなされました。

鹿児島大学の瀬戸君は、ベトナム留学生とのゼミでの出会いから、ベトナム雑貨の貿易をユースワーカーズの事業として取り組んだ経験を、若い母親でもある杷木子ども未来館の柳田さんは自らの子育てと地域

でのこどもの成長を取り混ぜながら報告を行ないました。

労協から報告した鹿児島始良事業所の有馬君は、都会での挫折と鹿児島に戻ってもなかなか自分らしい生き方ができず悩んでいた時に労協と出会い、仕事を通してみんなに支えられ、少しずつ自分が変わり、今は地域福祉事業所「愛」の一員としても働き始めた報告がなされ、会場の感動も呼び、「スチューデントワーカーズコープの取り組みの中で逆に自分たちを励ましている。」という鹿児島大学の学生の発言もありました。

討論では、若者の取り組みと年配者との係わり合いが取り上げられ、「今の若者は見極めや諦めが早すぎる。『石の上にも3年』という言葉もあるようにもう少し粘り強い働き方をすべき。」という発言に、会場の若者から、「若者がダメというのではなく、人生の先輩として年配者がもう少し長い目で見て若者を育てることも必要なのでは。やめていった若者にも問題はあるだろうが、そういう若者だけではない。」という意見が集中し、世代間のギャップをめぐる論議にもなりました。

コーディネーター

川原隆哲（労協センター事業団中国事業本部）

渡口政也（労協センター事業団九州北事業本部）

報告者

松尾孝治（北九州青年みらい塾）

瀬戸健太郎（鹿児島大学ユースワーカーズコープ）

有馬玄市（労協センター事業団始良事業所）

柳田祭・村上静（子ども未来館・はき）

横尾正文（市民生活支援センターふくしの家）

安土茂亨（子育て支援グループ「にじ」）

コメンテーター

神田嘉延（鹿児島大学）

恒吉紀寿（北九州大学）

障害を持ちながらもボランティアからNPO組織に育ててきたふくしの家の横尾さんは「若者には粘り強さがないと思ってきたが、若い人たちに給料を保障するための資金繰りの苦勞から自分はいつのまにか経営者の目で見えてきていたのではないか。今日の集会に出て大変勉強になった。」と感想を述べられました。

今回の分科会は若者がテーマではあったが、非営利事業での新しい働き方、生き方が話し合われた分科会であったように思います。(木下)

1. 松尾孝治（北九州青年みらい塾）

はじめに、第4分科会の「商店街活性化と住民参加のまちづくり」の報告者である松尾孝治さんから、第7分科会の冒頭、報告があった。

北九州青年未来塾とは、元々、北九州教育委員会から発足し、まちづくりを基本に青年が主体的に行う北九州の地域振興や地域活性化をイベントとして捉え、イベントを

自ら企画・運営していくことで、青年相互の交流のきっかけとし、自己研磨の場としていくことを目的とする組織である。松尾さんは、通常、薬剤師の仕事をしてしながら、関わっている。

最近取り組んだイベントとしては、高校生未来塾・焼うどんバトルがある。

- 高校生未来塾・・・将来に期待と不安を持つ高校生の気持ちを、様々な研修を通して学んだことを考えながら、高校生自らの手でイベントをつくり、実行していく。
- 焼うどんバトル・・・小倉が発祥の焼うどんに着目し、イベントとして取り上げることで、地元または市外に向け魅力のある小倉の食文化をアピール。

2. 神田先生からの問題提起

今の若者を歴史的に考えると、進歩ではないか？

昔は、物事は集団で決まっていた。

若者は、個性的に生きていたいと思っているの

に対して、大人は、そのことを喜べない。それは、仕事でないと、社会が回っていかないから。

若者と大人が、対立していくのではなく、お互いの弱点を認め合うことで新しいものができたのでは？

3. ベトナム貿易を通じて仕事おこしを学ぶ・ユースワーカーズコープの試み 瀬戸健太郎（鹿児島大学ユースワーカーズコープ）

学生の仕事おこしを考えるユースワーカーズコープの活動について報告。その中で、労協センター事業団との関わりや、ベトナム雑貨展を開き販売した話。

又、スペインのモンドラゴンへ行っての苦労話を通して、協同組合を体感したことが伝わってきた。

4. 労協と私（地域福祉事業所づくりに参加して）

有馬玄市（労協センター事業団鹿児島始良事業所）

都会での挫折を通して、又、労働者協同組合に入って自分が変わっていったことを報告。特に、人と人との交わりの中で、一度は押し潰されていった自分が、協同組合の組織の中で、勇気づけられ、新しい地域福祉事業に取り組んでいく姿勢が感動的だった。

5. 柳田祭・村上静（子ども未来館・はき）

常に子どもの視点に立って、接していくことに共感した。まだ、若い2人であるの

に、自分の考えをしっかりと持っていて、柳田さんは、母親をしながら取り組んでいることを聞き、立派だと思った。未来に向けて、その主人公である今の子どもたちの問題は、重要だし、その為に、私達大人が何をしてあげられるかが大きな意味を持っていると思う。

6. 地域社会における若者のかかわりと、ボランティアからNPO組織作りへの発展

横尾正文（市民生活支援センターふくしの家）

2人で2万円から始めたことや、介護に関わる若者を育ててきた取り組みの中で、ボランティア精神も大事だが、企業家としての精神がなくてはならないという報告をされた。今では、宅老所から託児所、又、デイサービスにいたるまで、介護保険に関わる事業をしている。事業高も6千万円から1億に到達。

7. 討論

高齢者と小さい子ども 高齢者から子どもへ伝達することについて

若者と子ども

- ・子ども未来館・・・子どもは自由を求めに来る。若者（青年）が接した方が、目標になりやすい 悩みなども聞いてあげられる
子ども 青年
高齢者が補う

- ・夾竹桃・・・鬱の症状があったが(酒におぼれる)ヘルパー講座によって変わった。周囲に応援された。
- ・福祉大学4年生(学生)・・・NPO法人に就職内定。
地域との関わりが必要。
- ・瀬戸さん・・・1度つまづくとやり直しがきかない状況を協同の思想や周囲の支え合いで解決していく。他の人に伝える。
- ・子ども未来館・・・自信を持って飛び込んでいくことで、周囲がいきいきしてくる。
社会経験のある人の言葉には、重みがあ

る。
若い人には若い人が対応する。

8. 安土茂亨(子育て支援グループ「にじ」)福岡工業大学学生

通常、大学のカリキュラムに沿っていけば、就職先もほとんど決まっている。(一本のレールに乗っている感覚になる。)そんなことが納得行かなくて、北九州の3つの大学の子育てサークルに参加し、違った視点から考えて見たいと思った。

(山口)

